

脳梗塞既往患者における呼吸器症状の発症に対する ACE阻害薬の関与についての検討

にいがた調剤薬局 吉田 / 井上 幹雄 大石 美也

【背景と目的】

高齢者は呼吸器系の既往歴が無いにもかかわらず繰り返し風邪をひいたり、慢性的な痰のからみに悩まされる患者も多い。一方、大脳基底核に梗塞が見られる患者は、ドーパミン産生低下により高率に嚥下能力の低下が見られるとされる。これに対して近年、ACE阻害薬の副作用である空咳の原因とされるキニン - カリクレイン系の抑制によるサブスタンスPの上昇作用を利用し、不顕性誤嚥・誤嚥性肺炎を予防・改善するという報告が見られる。そこで今回、脳梗塞既往歴のある患者を対象として呼吸器系症状の発症に対するACE阻害薬の関与についてレトロスペクティブに調査したので報告する。

【方法】

脳梗塞既往歴があり、かつ降圧剤による治療を受けている患者を抽出しACE阻害薬を含む群と、含まない群について過去の薬歴を見直し、咽頭・気管に関係する症状の有無について調査した。ただし、手術歴を含む呼吸器系既往歴のある患者、ドーパミン系製剤、免疫抑制剤服用中の患者、喫煙習慣のある患者は除外し、梗塞発症後の呼吸器症状について検討した。統計学的手法には、²検定、t検定にて行った。

【結果】

全解析症例は158例。うちACE群は30例、非ACE群は128例であった。追跡期間中に呼吸器症状を発現した患者は、76例(全体の48.1%)でACE群9例、非ACE群67例であり、呼吸器症状の発現と服用薬剤の差異について有意な関連性を認めた(²test: $p < 0.05$)。年間風邪回数は、ACE群 0.8 ± 0.2 回、非ACE群 1.0 ± 0.2 回(t-test: NS)。慢性的な痰のからみを訴える患者は76例中14例で(18.4%)全て非ACE群であった。

【考察】

以上の結果より、呼吸器症状の発現と降圧剤の種類に有意な関連性を認め、慢性的に痰が絡むようになったと訴える患者は全て非ACE群であり、ACE阻害薬の呼吸器症状予防の可能性が示唆された。さらに今回の結果から、薬歴簿に記載された患者情報を分析することによって、医薬品の新規有用性発見の可能性が示唆され、患者の経時的な体調変化を集積、分析できる保険薬局の機能の重要性が示された。